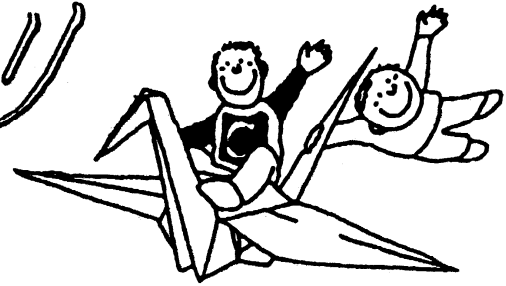


ジュラーヴリ

ЖУРАВЛЬ



今年もロシアの非汚染地のノボ・キャンプに ベラルーシの子どもたちが参加しました！

皆さんから寄せて頂いた「保養カンパ」で、今年もベラルーシの汚染地クラスノポーリエとチェリコフから、ロシアの非汚染地域にある「ノボ・キャンプ」に子どもたちが参加することができました。参加したのは、11歳から15歳までの子どもたち、計6人です（クラスノポーリエ：女子1人、男子2人、チェリコフ：男子2人）。クラスノポーリエの小児科医ベーラさん



んに、モスクワ在住の通訳の松川直子さんから電話で近況を聞いてもらいました。「ノボ・キャンプは今年も子どもたちがワクワクするようなプログラムが豊富で、サークルもたくさんありました。参加した子どもたちはとても満足して戻ってきました。ドイツからもボランティアの人々が来ていたりして、おもしろい体験ができたそうですよ。」とのこと。「日本では、フクシマで皆さん大変な思いをしておられるので、チェルノブイリ被災地へのカンパは難しいのでは…と、今年のノボ・キャンプ参加は諦めていました。それでも日本の皆さんはカンパをして下さり、おかげで今年も私たちの子どもたちはキャンプに参加することができ、子どもも親たちもとても喜んでいました。ありがとうございました。支援して下さいた日本の皆さんにくれぐれもよろしくお伝え下さい。」とのこと。また「救援関西の皆さん、またよろしければフクシマの皆さんも、ぜひ一度ベラルーシに来て下さい。」とも言われていたそうです。今年の春に来日し、フクシマ各地で交流と講演をされたベーラさんとバーリャさんは、フクシマの皆さんのことをとても気にかけて下さっています。

ベラルーシも今は秋、26年を経たチェルノブイリ被災地では、収穫作業で大忙しだそうです。「救援関西」から今年も12月にチェルノブイリ被災地を代表訪問する予定です。引き続き支援カンパも届けます。またチェルノブイリとフクシマを結んだ今年の取り組みを振り返り、来年以降の活動についても、話し合ってきたと思います。

今後ともどうぞよろしくご協力をお願いします！



今年の原水禁大会に、昨年に引き続き、ロシアのアントン・ヴドヴィチェンコが招待されました。アントンさんはロシアのNGO「ラディミチ〜チェルノブイリの子どもたち」が運営するロシアの非汚染地域での「ノボ・キャンプ」の責任者です。ノボ・キャンプには「救援関西」が支援するベラルーシの子どもたちも参加しています。広島・長崎での原水禁大会に参加された後、京都で「ゴーゴーワクワクキャンプ」に参加。その後、福島県の会津に行き、浜通りや中通りの放射線量の高い地域に住む子どもたちを汚染の比較的少ない会津に迎える「県内保養」に取組む市民の方々らとの交流を行いました。

メデイカルチェックとアントンさんとの交流

（京都南丹の夏の家）

8月10日と17日に、振津医師と「ゴーゴーワクワクキャンプ・夏の家」へメデイカルチェックに行きました。「ゴーゴーワクワクキャンプ」はフクシマ事故後の昨年春から学生を含む若い人々で立ち上げた子ども達のためのキャンプです。京都・南丹の古民家で、福島や茨城の汚染地からの子ども達を、少しでも放射能の影響が少ない環境で過ごしてもらおうと、いろいろ楽しい企画をしています。40日間の長期キャンプで、子ども達も総勢28名。そのご家族も来られたり。なかなかの「大家族」でした。

（子ども達の健診・親の思い）

企画面・安全面・経済面、本当にたくさんの課題を献身的な若い方達の努力と、支援の皆さんの力で運営されて、頭の下がる思いです。被ばくに対する思いは同じです。金も人も余り余裕のない「救援関西」としては、支援カンパと併せて、毎回メデイカルチェック（子ども達の健診）で応援しています。

京都からずっと丹波より。山と水田と小川と池と大きな古民家がつづき、日本の原風景そのものの素敵な環境。都会の子は適応してるかな？空の青さ緑の深さが美しすぎて、駅に降りると、なんか子どもじゃないのにときどきワクワクしました。

ベビーから中学生まで、大きな病気も怪我もなく元気になっている様子で、無事に健診は終わりました。去年や前回のキャンプのリピーターの子どものが多かったのですが、去年わがままを言って学生にくっついてきた子が、他の子の世話をしていたり、ストレスのせい、あまり人と関わらない性格だった子がしっかり話をしていたり、断片的ですが、子ども達の成長が見て取れて楽しい健診でした。

実際には直接の診察も大切ですが、お父さんお母さんのご心配や相談をうかがうのも重要です。鼻血が出たのは放射能の影響か？甲状腺の超音波検診で「引っかけた」が、その内容を教えてくれず「大丈夫」とだけ言われた。どういうことか？等。また、転居した後の環境適応の相談や心の問題も話されました。汚染地でスタッフがみんな避難してしまい、逃げ出せなくなった看護師とその子どもさん、忙しすぎて子どもの世話ができず、子どもの調子が悪くなった等のエピソード。お母さん達の必死の思いを受けとめる場所がない。だんだん地元で放射能のことを話せない雰囲気が出てしまい、ちょっとしたことを率直に相談できなくなっていることなどが伝わってきました。

（ノボキャンプのアントンさん）

昨年のキャンプにも参加してもらった、ロシアの「ノボキャンプ」のアントンさんに今年も来てもらい、お父さんお母さん方と交流しました。昨年のキャンプが行われた精華大も自然が豊かで子どもと若い人が元気だととてもよかったと言っていたアントンさんは、今年の古民家も喜んでいました。合宿というより普通の家のように、何気なく過ごしている子ども達、ひとりひとりに関わっている学生達の対応に感動していました。「ひとりになってしまう子がいないように、よくみているね」。26年前子どもだったアントンさんは、チェルノブイリの事故後、すべてが変わってしまった環境の中で、子ども達が希望を失わず生きていくための活動に参加しました。放射能の影響を少しでも減らすためのキャンプに参加。その後、その運営にかかわり、今はその中心になって活動しています。ノボキャンプでは、多くの子どもが非汚染地で過ごせるようにするだけでなく、その活動を継続できるように、そして、内容を豊かにしようと、大学生やボランティアが一年前から準備し、パソコン教室やスポーツや芸術や自然と親しむ楽しい企画を創っています。

日本のほうが、経済的に余裕あるはずなのに、まだ国の責任で子どもの保養の企画はされていません。個人的な負担では長く続けられません。チェルノブイリの経験交流の中で、若い人々の頑張りと思いを形に、公的支援に、制度に、押し上げていきたいと思いました。

由美

チェルノブイリの被災地からアントン・ブタビチェンコさんを迎えて

2012年8月11日「お産と地域医療を考える会津の会」講演会より

お産と地域医療を考える会津の会は、身近な地域で安心して赤ちゃんを産み育てる環境を守っていく事を目的として、2009年に立ち上がりました。

病院から産科がなくなってしまう現状に対し、身近なところでお産のできる環境の大切さを訴え、署名活動、学習会などをしてきました。



お世話になった千葉さんのお宅の前で

んがチェルノブイリの現状を踏まえて答えるということで、参加者同士真剣な意見交換ができました。

アントンさんのお話にありましたが、ノボツィプコフ地区に住む人々の多くは、主に経済的な理由から土地を離れる事ができませんでした。しかしチェルノブイリが引き起こした問題が長期に及ぶものであることを認識したところから、さまざまな活動が始まったということです。まさに今の福島状況と重なることだと感じました。ノボツィプコフ地区の人々は汚染と被爆から身を守るための啓発活動を長年にわたって続け、地域の人々のために活動する組織「ラディミチ」を創設しました。アントンさんはその中で「ノボ・キャンプ」の運営を担当しています。汚染地域の子供たちは年に2回、汚染されていない地域で2～3週間過ごす事が大事だということで国が制度化しています。健康診断は年に1回無料で受けられることなど、これからの福島を生き抜くためのヒントをたくさん学ぶ事ができました。

今、川俣町の団体が募集した2泊3日の短期保養に取り組んでいます。子供たちのためにこのような保養プログラムを有効に継続するためには、国や県の制度化ということが必要だと強く感じています。

2012. 9. 14 代表 千葉親子

(ゴーゴーワクワクキャンプから投稿していただきました。写真はゴーワクのブログより引用しました。)

チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西 様へ

ゴー！ゴー！ワクワクキャンプ
2012年夏の家：代表田中一(い)央(お)

拝啓

朝晩の涼風が心地よく感じられる季節となりました。いかがお過ごしでしょうか。

メールでのお礼となり、誠に申し訳ありません。ゴーゴーワクワクキャンプにおきましては、多大なご支援とご協力をありがとうございました。おかげさまで2012年夏の家も、無事終えることができました。

キャンプは7月24日から8月31日まで、福島県、茨城県、宮城県、栃木県といった地域から、総勢28名の子どもたちと、17名の親御さん(送迎のみの参加も含む)を受け入れました。

今年も、多くの方が出来るだけ参加しやすいように、年齢や地域を限定せず、また参加期間もいつ来てもいいという形にしました。1歳の赤ちゃんから中学2年生まで、多い日にはスタッフ、参加者を合わせて50人近い人達が南丹交流の家で寝食を共にし、子どもたちの大きな病気やケガもなく、楽しくにぎやかな日々を送ることができました。

長い子は丸一ヶ月間参加し、その中で遊んで、ご飯の準備をして片付けて、友達とケンカして叱られてと、いろんな経験をする中で、大きく成長していきました。はじめは叱られてばかりだったのに、最後の方には他の子のケンカの仲裁をしたり、諭したりしているのを見ると感慨深い気持ちになりました。

イベントもさまざまなのが企画されました。ウクレレの演奏者が来てくれたり、山に散策に行ったり、みんなでパ



ーベキューをしたりしました。中でもゴーワクがお借りしている畑にニンジンの収穫に行った時は、みんなすごく楽しそうに、かつ真剣に収穫していました。なかには丸々育ったニンジンも、道具も使わずに何十分もかけて掘り出して、嬉しそうにみんなに見せていた子もいました。

その子はお土産にそのニンジンを持って帰って、「生のまま食べました、おいしかったです。」と手紙をくれました。

スタッフには、昨年関わってくださった方だけではなく、今年初めて関わってくださった方も含め、50名以上の方に来ていただき、子どもたちの見守りや食事作り、掃除、洗濯など、生活を共に作っていきました。また、地元の小学校がプールを貸して下さったり、夏祭りに参加させてもらったりと、地域の方たちとの交流もあり、いつも子どもたちのことを気にかけてくださいました。

参加されている方たちは、楽しみな気持ちだけではなく、現地での不安な気持ちもいっぱい抱えながら参加されています。

放射能汚染地域では、「被ばく」や「保養・避難」といった言葉を出すことは困難な状況になっています。現地でも、移住先でも、子どもたちは生きづらさを抱えています。どちらの道を進むのもして楽な道ではなく、その選択をするのは大変な勇気が強いられます。ゴーワクに限らず、多くの保養キャンプが、その選択の後押しになるような場所になればと思います。



震災、原発事故から一年以上経ち関心の薄れていく人も多くなか、みなさまの温かい思いに支えられて、今年もキャンプを実現できたことを、本当に感謝いたします。

キャンプの全体的なふりかえりは、時間をかけて行い、今後の活動に活かしていきます。また、昨年につき、今年も報告書を発行し、みなさまと共有していきたいと考えています。

長かったゴーワーク「夏の家」も8月31日に最後の一人が帰り、無事終了しました。涙のお別れかと思いきや、みんな「またね!」「来年な!」と満面の笑顔で帰って行きました。

参加した子どもたちとその家族とのつながり、そしてみなさまとのつながりを大切にしながら、また来年キャンプで会えるように、頑張っていきたいと思えます。

今後とも、みなさまのご支援を、どうぞよろしくお願いいたします。

敬具



バレエ公演「いのちへの鎮魂の歌」－福島へ－

2012年8月18日、バレエ「いのちへの鎮魂の歌」－福島へ－ Pカンパニー広島公演が広島平和公園近くのアステールプラザでありました。

小谷ちず子さんが率いるダンスコアポシブルは、2011年の「平和への種ともなれば」公演でも、ヒロシマ・ナガサキ・チェルノブイリをテーマに芸術性高い舞台を作り上げ、命を謳いあげてきました。Pカンパニーはダンスコアポシブルから選抜したメンバーで構成された舞踊集団です。メンバーの思いはあっても、広島での公演は勇気のいるチャレンジでした。公演の実行委員長として支えて頂いた「原発はごめんだヒロシマ市民の会」の木原省治さん達の屈力と、編曲指揮の稲垣宏樹さん声楽家の宮越昌子さん達の協力で、見逃した関西の皆さんを残念がらせるような素敵な舞台になりました。

広島出身の小谷さん自身が、ためてきた祈りの結集であり、見てほしいこと知ってほしいこと共有したいこと始めたいこと、原点である広島被爆地なればこそ・・・いわば悲願の舞台です。

- プログラム1：チェルノブイリの祈り①ベラルーシのこどもたち
②汚染一母の悲しみ
③チェルノブイリ私たちみんなの悲しみ
- プログラム2：コンサート①ピアノソナタ 1905年10月1日（ヤナーチェク）
②武鹿悦子を謳う
③シャコンヌ（バッハ）
④花のワルツ（チャイコフスキー）
- プログラム3：命への鎮魂の歌①他には何も残っていない
②始まり
③原爆投下
④平和への種ともなれば
⑤誕生
⑥折鶴の空
⑦終曲－明日－



プログラム1で、あまりにもフクシマに重なる、チェルノブイリのあの日のことをあらわしました。楽しそうな子ども達と目にみえない放射能。そして、「私たちみんなの悲しみ」は「誰か」ではなく「私自身の痛み」として次々と現実のものに、今もなりつづけている。

プログラム2では、「命」と「祈り」をテーマにしたクラシックコンサートになりました
プログラム3は、谷川俊太郎の詩で有名な曲「他には何ものこっていない」ではじまります。

次に戦争に突入する前の社会状況を懐かしい唱歌や軍歌を交えて表現。決して戦場だけが戦争ではなくその始まりに無関心では、遅い。不穏な雰囲気。

そして原爆投下。

その後の人々の運命。

戦争が終わってからも、生き残ったにもかかわらず、被ばくによって死に向かう少女の体験。

折鶴と鐘の音で表現される小さな女の子の祈りの姿が可憐でした。

ヒロシマ・ナガサキの教訓を生かせず、1986年のチェルノブイリ事故を迎え、さらに2011年のフクシマを許してしまった私たち。放射能は、人の健康を蝕み、生活を壊し、そして人生をうばいます。小谷さんたちは、公演のずっと前の4月から毎月広島平和公園の鐘の前で踊ることを続けてきました。Pカンパニーのメンバーのように、一人ひとりが自分の思いを形にすることは強い力があると思いました。(私は踊れませんが、朗読を担当させていただきました。)

フクシマを核の時代の終わりの始まりにするために・・・

由美

「いのちへの鎮魂の歌 ー福島へー」広島公演から教わったこと。

原発はごめんだヒロシマ市民の会：木原省治

自らの目的を達成しようとした時、その目的が「原発の無い社会を作ろう」という大きなものから、街頭に立ってマイクを握り通行人に、出来るだけ分かりやすく自分たちの思いを伝えようとする時、心が伴っていないとこの訴えは相手の心に響くものにならないし、嘘パッチと思われるだろう。

この度のダンスコアポシブル「いのちへの鎮魂の歌 ー福島へー」広島公演は、改めて心が伴う運動の大切さを教えてくれた。ダンスコアポシブルを主宰している小谷ちず子さんは、この公演を成功させるために、4月から毎月広島に来て、平和公園内にある平和の鐘を舞台に、鎮魂・平和への祈りの為に踊った。

「成功させるため」という表現をするのは、小谷さんに失礼だろう。普通、このようなコンサートの成功は、チケットがたくさん売れて、黒字になるというのが「成功」というように思われるかもしれない。もちろん、それも大切なことではあるけど。

しかし小谷さんの「成功」は、両親が被爆者という中で育った被爆二世として、自らが「平和への種ともなれば」という溢れるばかりの情熱を、僕は彼女から強く感じ取った。

ダンスコアポシブルのダンサーは、女性ばかり約30人のメンバーで、小学生くらいから年齢幅も広く、猛暑の中、公演前日に広島へ入りさっそく平和公園を訪れた。まず原爆資料館を見学することにした。館内では、映像を食い入るように見る人。焼け爛れた皮膚の被爆者の写真に、目を留めたままのダンスメンバーの一人。

あらかじめ決めていた、出口集合時間が5分、10分と経過しても彼女らは誰も戻って来ない。ようやく一人、二人の顔を見て一安心したが、何人かの眼は赤く充血し、涙の流れた跡が見えた。

やっと全員の数を確認して、次に平和公園内の碑めぐり。まず、資料館近くの「教師と子どもの碑」を取り囲んだ。碑の台座には、原爆歌人正田篠枝が書いた「太き骨は 先生ならむ そのそばに 小さき頭の骨あつまり」僕は「皆さんはダンスで思いを表現する者として、特に感受性の強い人だと思うから、あえてなにも説明しないから、この短歌や空を見上げる教師の顔や眼差しから、それぞれが気持ちを受け取って欲しいよ」と話した。

その後、原爆慰霊碑、原爆の子の像、韓国人原爆慰霊碑、原爆供養塔、原爆ドームなどを見学した。原爆の子の像の前では持参した千羽鶴を納め、この像の周りをみんなで手をつなぎ、平和を作るための気持ちを新たにした。

夕食は、みんなが楽しみにしていた広島焼き。若い笑顔と声が店中に響いた。

そして、翌日は公演の本番。僕はリハーサルから観ていたが、小谷さんの厳しい声がダンサーの皆さんに掛けられる。その張り詰めたような空気が流れる中、またまた小谷さんのプロとしての、強い気持ちを受け取った。

来場された人数は、200人。せめてもう50人はと期待していたが、小谷さんは「自分の子どもや孫が出演しない公演では、これで十分でしたよ」と打ち上げ会で話され、僕は慰めてもらったような感じになった。

公演の内容については、わが会の会員から送られてきた次の感想で受け取って頂きたい。「核の恐ろしさやその被害にあった人々の感情を全身で表現していて、見ていて心が苦しくなるほどでした。うまく言葉で表現できませんが、観客にストレートに訴えるものでした。文化や芸術によって内側から心動かされると、多くの人は自ら進んでそれに沿った考えや行動を取ると思います。脱原発運動は、多分これから長い年月がかかると思いますので、途中で人々の関心が薄れたり、一部の人たちだけの活動になったりすることがないよう・・・そういう意味で、今日のような公演が重要になってくると思いました」と。

それにしても、世界を含め、広島以外から広島を訪れる人によって、広島に住む自らの使命を感じるようでは、僕の感受性も薄れたものだと反省するのである。

この夏の取り組み

奈良市 堀田美恵子

私の家の近所に「なら CO-OP」のお店があるのですが、そこに地域の人たちが管理している掲示スペースがあります。(小さな壁面ですが椅子と机が置いてあるので人々がよくくつろいでいます) 掲示の内容は2週間ごと変わります。今年の夏の初め、そのスペースを使って展示をする事になりました。

「チェルノブイリとフクシマをつなぐ」と言うテーマにしました。チェルノブイリ・ヒバクシャ 救援関西が交流のたびに子どもたちから頂いた絵を展示したいと思いました。

チェルノブイリ原発事故の放射能汚染図と、福島原発事故後の放射能汚染図、そしてチェルノブイリ20年を特集した東京新聞の特集記事をパネルにしました。コンパクトながら展示が整いました。地域で署名を集めていて感じた「福島の原発事故はひとつごと」をなんとか少しでも自分の事として考えてもらえたら・・・と思い内容を考えました。

なにげなく見る人を対象にしています。あまり期待はできません。反響もあるわけではありません。ただ展示してるだけです。それでも数人の友だちやそのスペースの管理をしている地域のメンバーからは良い評価をもらいました。



2012年7月ならコープ朱雀展での表示

そして、夏の終わりの8月後半の1週間「いのちの叫び～チェルノブイリ 風下の村～貝原浩原画展」を行いました。1992年2月に日本チェルノブイリ連帯基金の人たちとベラルーシを訪れた画家…貝原浩さんが「絵描きの自分には一体何ができるのか・・・」と自問の後、再度ベラルーシを訪れ一気に書き上げたという大判の和紙10枚に描かれたスケッチ。私たち奈良のメンバーが貝原さんのチェルノブイリス

ケッチに出会ったのは今年の春だったのですが、20年前に描かれたこの絵の訴えをみんなに見てもらいたいとの思いで企画しました。今回の会場に来て下さった方々からチェルノブイリと福島、日本を重ね合わせた感想がたくさん寄せられました。



東京電力福島原子力発電所の事故は1年半経った今でも、本当に現実なんだろうかという思いと、こんな事が起こってしまったという後悔、無念を抱かせたままです。しかし事実は覆しようもなく、できることはと思うと、過去から学ぶことしかないのではと思います。過去のヒバクの歴史から学び人々の「いのち」への思いを馳せてできることをしていかななくてはと思うばかりです。(2012. 9月)

☆アンゲリカ・クラウセン(IPPNWドイツ議長)を迎えて☆ 脱原発と再生可能エネルギーの推進に向けて ～ドイツの経験を聞く～

8月末に広島で開催された“核戦争防止国際医師会議(IPPNW)”に参加された同会議ドイツ支部議長のアンゲリカ・クラウセンさん(精神科医)をお迎えし、9月9日、ドイツにおける脱原発と反戦平和活動についてお話を伺いました。



アンゲリカさんは「なかなか事故が収束しないので、ヨーロッパ中が心配しました」と'86年チェルノブイリ事故から説き起こし、「事故処理に当たった労働者は放射能で壊れたロボットの代わりをさせられた」とヒバク労働の過酷な状況に言及、当時IAEA代表が「原子力産業はチェルノブイリ級の事故が年に1回起こっても対処できる」と暴言を吐いたと非難された。

チェルノブイリはひとまずの収束に11日かかったが、福島では25日間でなんとか一段落したものの、なお収束には程遠いとも。振津さんとともに福島を訪れ現地も見てこられたのだ。

ドイツの脱原発運動は核の脅威を同一線上で認識しているという点で、反戦平和活動と分かちがたく結びついている。各年代にそれぞれ必然的テーマがあり、75年からカルカーやブロックドルフで原発建設反対を訴える多人数のデモが組織された。時には警察の行き過ぎに対して過激な行動も辞さずということも生じた。

にもかかわらず 1965年～1990年の間にドイツでは19基の原発が建設されている。

80年代前半は反核運動を中心に、'86年には大規模な反原発行動がドイツ各地で展開され、1998年社民党と緑の党が政権を担うと、やっと脱原発宣言がなされた。再生可能エネルギーによる電力の買

取りが制度化され、飛躍的に自然エネルギー利用が進んだ。

その後 政権交代で脱原発構想は後退していたが、今またフクシマ事故を受け、再生可能エネルギー設備が増加（2008年 14% → 2011年 20%）。原発の廃炉も決定され、フクシマ以前は17基だったが9基まで減らされることになった。

脱原発派の ・核エネルギーはコントロールできない ・核エネルギーは私たちの命をゲームのコマにする ・放射能のゴミを残すのみ ・原発は核兵器工場と同じ ・電気のためにリスクが高すぎる ・代替エネルギーはある だから世界中で脱原発を！という主張が多くの市民の共通認識にまで広まった結果である。

ドイツでの再生可能エネルギー導入の鍵は ・再生可能エネルギーの電気が優先的に送電線に送られる ・価格設定が高い ・コストは全員が負担する ・再生可能エネルギーによる電気生産の上限を設けない など合理的に再生可能エネルギーが奨励されるシステムができてきていることだ。また実際に再生可能エネルギーが躍進する過程で雇用が増加したことも、大いに後押しをしている。「原発を作るには最低5・6年はかかるけれど、ソーラー発電設備を取り付けるには3週間しかかからない」と茶目っ気のある理由も。

彼我の違いに嘆息をついていると、「日本のトイレ設備はやりすぎ」（以前もドイツの緑の党の方が言っていた。至れり尽くせりの日本のトイレには『感銘』を受ける人が多い）「ペットボトルもリユースすべき」と、違う視点、でも実は同じエコロジーの観点からの指摘を受けた。

ドイツでは、古い石炭採掘場や核兵器配備跡地にメガソーラーが建設された。歴史を塗り替えているみたいだ。石油や石炭やウランに世界が振り回されると、戦争が起こる（これからは水を廻る争いの可能性も指摘）。「太陽や風はどの国にもあり、私たちに請求書をよこしません」とは、本当に納得のいく弁。地域単位での再生可能エネルギー利用や、家庭でできる小規模省エネや創エネの実践例の紹介もされた。

東日本大震災・津波・東電福島第一原発事故によって日本は未曾有の被害を受け、現在過酷な状態にあるが、この難局をよい方向に切り替えるチャンスとして、再生可能エネルギー利用の未来を大いに期待する、それには市民一人ひとりが考え、仲間を作り行動してゆくことが大切との思いを熱く伝えてくださった。

急な開催にもかかわらず50人も参加者があり、よいお話を聞いていただけました。

集会のあとささやかな親睦会を持ち、仕事で講演に間に合わなかった方もいっしょに、アンゲリカさんご夫妻とのひとときを楽しみました。私たちも自己紹介し、日ごろの活動を伝えました。日本の焼酎を召し上がったご夫君は上機嫌で、2人の子どものことやご自身の活動について話されました。お好み焼きにヒントを得て、帰宅したら新しい料理にアレンジしてみても。夫妻の日本最後の夜は和やかに更けてゆきます。ドイツ語のさよならは「またお会いしましょう」ですね？ その言葉どおりになりますように。（英語ができないのが残念な 田中でした）



「反核シスター」ロザリー・バーテル博士とチェルノブイリ

6月14日、ロザリー・バーテル博士が、享年83歳で逝去されました。（遅ればせながら…）「チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西」としても、心からご冥福をお祈りしたいと思います。

バーテルさんは、文字通り世界を飛び回りながら、世界の核被害者や環境破壊に苦しむ人々のた

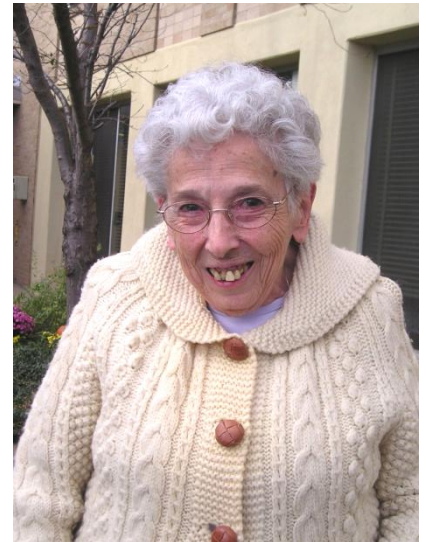
めに被害現地にも度々赴き、科学者として被害を調査し告発し、被害者自身の活動を支えて健康と人権の回復のために闘ってこられました。（バーテルさんの活動やお仕事を全部ここで紹介することはできませんので、今回の原稿では、チェルノブイリ関連のことを中心に少しご紹介します。生い

立ちや反核の活動を始められた経緯などについては、伝記「反核シスター／ロザリー・バーテルの軌跡」、中川慶子：訳、緑風出版、をご参照下さい。）

バーテルさんは、1986年にチェルノブイリ原発事故のことを知ってすぐに、原発労働者や消防士などが急性障害のために治療を受けていたモスクワの第六病院に自著の“*Handbook for Calculating the Health Effects of Exposure to Ionizing Radiation*”（邦題「放射能毒性辞典」、泷脇 耕一：訳、技術と人間）を送ったそうです。その後数回（おそらく三回）訪問されています。初めて訪問されたのは、事故から3年後の1989年で、30キロ圏内も視察し、人々が避難したプリピャチの街も訪れ、人影のないアパート、学校、公園の遊具、床に散乱した古いイコン（キリストや聖母像）を見て、心を痛められました。二回目は1991年で、「事故当時18～30歳だった若い事故処理作業従事者の67%が様々な慢性疾患にかかっている」という深刻な健康被害の実態などを報告されています。その後も、甲状腺ガンの増加や、ガン以外の様々な慢性疾患で汚染地の子どもたちの健康が全体的に悪化してゆく一方で、国際原子力機関（IAEA）、国際放射線防護委員会（ICRP）などがチェルノブイリ被害の過小評価を行ってきたのに対し、バーテルさんは厳しい批判を続けられました。チェルノブイリ事故10周年には、チェルノブイリ被災者、世界の反核活動家や心ある科学者・医師と一緒に、チェルノブイリ被害を過小評価した「IAEA国際会議」に対抗して開催されたウィーンでの「国際人民法廷」を組織されました。（日本からも、「チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西」代表で長崎被爆者の山科和子さん、「ヒバク反対キャンペーン」の定森さん、そして振津も証言。）

バーテルさんは、日本の反核運動とも深い関係のあった方で、原水禁などの招聘を受け、数回日本を訪れておられます。広島・長崎の被爆者の方々とも長年にわたり深い交流を持っておられました。

原水禁とも協力して、1987年（ニューヨーク）、1992年（ベルリン）の二回の「核被害者世界大会」開催にも尽力されました。2007年の広島での「第3回ウラン兵器禁止を求め国際連合（ICBUW）世界大会」では基調講演をされ、これがバーテルさんの最後の来日となりました。



昨年3月11日に起きた東日本大震災と東電福島第一原発事故の後も、日本の友人たち、とりわけ被災地の方々を心配して何度もメールを下さいました。「広島・長崎の被爆者、世界中のヒバクシャは、フクシマ事故のような甚大な核被害が繰り返されないように訴え続けてきたのに…」と深く悲しんでおられました。バーテルさんは、肺や心臓の持病を持っておられ、ここ数年は危機的な病状に陥ることも度々でしたが、持ち前の忍耐と意思の強さで乗り切って驚異的に回復してこられました。しかし、この6月に肺炎をこじらせてしまい、ついに帰らぬ人となってしまいました。亡くなられる二週間前にも、福島原発事故の放射能汚染についてのコメントをメールで送ってきてくれました。最後に体調を崩す直前までヒバクを強いられている人々のことを思い、仕事をしておられたのでしょうか。

小柄でいつも物静かなバーテルさんが、核産業や軍事産業、それを支持し推進する諸政府、そして核利用を進めるIAEAやICRPなどを鋭く批判されていた姿が思い出されます。常に被害者の側に立って、世界の先住民や人権を抑圧されている人々

や社会的弱者の側にいて、発言し行動され、また、そのような人々に心から愛されていた方です。

晩年にカナダから米国へ移り、カソリックのシスターたちの共同生活施設「マザーハウス」住まわれるようになってから、私は何度か泊まりがけでお会いしに行きました。いつも私を家族のように暖かく迎えて下さり、いろいろと相談にも乗って下さいました。「マザーハウス」での彼女の日常

に触れたことも私には大切な思い出です。いつもユーモアにあふれ、周囲への愛情に満ちたバーテルさんの人柄はとても魅力的でした。一緒に過ごした「時」を何度も思い返します。まだまだ学びたいことが沢山あったのに…と思います。バーテルさんの活動や仕事を、どう引き継いでゆくのかが、私たちに問われています。

振津かつみ

The Nuclear-Free Future Award



～「核のない未来」賞～

ヒバク被害のない世界をめざして

ともに活動してきた多くの仲間の皆さんとともに頂いた「賞」です！

9月29日、スイスで開催された「核のない未来」賞（Nuclear Free Future Award：NFFA）の受賞イベントに行ってきました。今回のイベントは、「核戦争防止国際医師会議」（IPPNW）のスイス支部とドイツ支部も協力し、「国際赤十字」発祥の地であるハイデンで開催されました。

NFFAについて、少し説明します。1992年にザルツブルグで、世界中から核被害者、特にウラン採掘や核実験の被害に苦しむ先住民が集まり「世界ウラン公聴会」が開催されました。当時、私も「証言者」のひとりとして参加し、ヒロシマ・ナガサキの原爆被爆者の健康と生活被害、そして日本の原発の燃料に使われるウランが米国の先住民の聖山で採掘されようとしていたことに対して、先住

民とともに反対運動に取り組んだことなどを報告しました。「公聴会」の後、その趣旨に賛同したフランツ・モール氏（ドイツ人）が、「公聴会」主催者と協議して設立した「フランツ・モール財団」が、毎年、「将来世代のために核のない世界をめざす」活動に貢献した人々や団体に賞を授与し、「世界を変えてゆくの促進しよう」と始めたのがNFFAです。賞の授与によって世界各地の活動を支援し、また受賞イベントなどを通じて志を同じくする人々のネットワークを広げようというねらいがあるのだそうです。

今回の受賞は、過去30年余りにわたって、多くの仲間の皆さんとともに、原発被ばく労働者、ヒロシマ・ナガサキの原爆被爆者、さらにチェル

ノブイリのヒバクシャ、ウラン採掘の被害を受けた先住民、核実験の風下住民、等々、世界のヒバクシャとの連帯した活動に関わり、核兵器も、原発も、ウラン兵器もなくしてゆこうと運動に取り組んできたことが国際的にも評価されたということです。ですからこの賞は、私個人に授与されたというのではなく「核被害のない世界をめざそう」とともに活動してきた仲間の皆さん、そして世界のヒバクシャの皆さんとともに頂いた「賞」だと思っています。これまで、ともに活動してきた皆さん、様々に活動を支えて下さった皆さんに、心から御礼を申し上げたいと思います。

実は受賞者にノミネートされたのは、ロザリー・バーテルさんが推薦して下さいましたためです。敬愛するバーテルさんに推薦して頂いたことが、私にとっては何よりも嬉しいことでした。残念ながら、バーテルさんは授賞式に参加して頂くこともできず6月に亡くされました。それだけにバーテルさんの推薦は「遺志をついで、仕事を続け

てほしい」とのメッセージのようにも感じています。バーテルさんのような立派な仕事ができるかどうかわかりませんが、そのメッセージを受け止めて、気持ちを新たにまた皆さんと進んでゆきたいと思います。

フクシマ事故後の今年に受賞したのは、フクシマ被災地との連帯した取り組みの重要性が国際的にも強く認識されているからだと思います。授賞イベントに集まった欧州の人々は、チェルノブイリと並べてフクシマを語り、一年半を経てあまり情報が伝わらなくなってきたフクシマで何が起きているのか高い関心を持っていました。「核のない未来」をめざす私たちの目の前には、起こしてはならなかったはずのフクシマ事故の放射能汚染と被ばくの厳しい現実があります。授賞式では「フクシマを核時代の終わりの始まりに」との呼びかけと、私自身の決意を述べてきました。

振津かつみ

好評発売中！！

《本の紹介》

「子どもたちのいのちと未来のために学ぼう 放射能の危険と人権」

第1章：「フクシマ」の「事実」を「事実」として、どう「学び」に活かせるか

「放射線管理区域」と同等レベル以上の汚染地で日々被ばくしながら暮らさざるを得ない福島県民の苦悩。そしてその中での「生きるための学び」が提案されています。

第2章：チェルノブイリ事故 26年の経験

「チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西」のチェルノブイリ被災地との20年にわたる草の根の支援・交流を通じて得られた情報と入手しえる限られた資料をもとに



今後のフクシマでの「放射線教育」と子供たちの健康管理について述べています。「人々の健康と命を守る」ことを中心にチェルノブイリの様々な経験を今後活かしていくことが重要と訴えています。

第3章：文科省の「放射線副読本」では子どもたちの健康も未来も守れない

文部科学省の放射線副読本を批判し撤回することを求める立場から書かれています。副読本では放射線は有益であり、あたかも 100 ミリシーベルト以下なら問題ないように記載しています。放射能にこれ以下なら影響はないという閾値はありません。これ以上の被ばくを許さないためにも「脱原発」から再生可能エネルギーへの転換を求めています。

第4章：「放射線副読本」にだまされないための基礎知識

「自然放射線と人工放射線」「半減期」「放射能の単位」などの頻繁に出てくる用語の「基礎知識」が、放射能の危険を本当に科学的に正しく評価する立場から解説されており、今後の理解に役立ちます。

フクシマ事故から1年7ヶ月が経つ今も事故は収束せず、放射能汚染は続いています。引き裂かれた生活は戻らず、先行きも見えず、人々は苦悩の中にいます。

再稼働反対、原発「ゼロ」の運動が高まる中で原発を維持したい人たちは被災地の被ばくによるリスクを過小評価し、「健康不安」として矮小化しようとしています。また「副読本」を通して放射線は安全なものであるかのように子ども達に教え込もうとしています。このような時期だからこそ、「事実を事実として」知り、フクシマの苦悩を受け止め、広めていくことが重要です。また「副読本」を撤回させなければなりません。

それぞれの章にはそれぞれのテーマに添ってグッと凝縮された内容が詰まっています。どこからでも読めます。ぜひ一読ください。

(福島県教祖・放射線教育対策委員会と科学技術問題研究会の編著 明石書店 定価：800円)



チェルノブイリ26周年交流企画賛同カンパ・カンパ・会費納入
ありがとうございました！！

3. 21~10. 13

小林夏江 三田恭子 木野英津子 小寺隆幸 小野洋・福島の子供を招きたい！明石プロジェクト代表 村上千佳子 松田光代 熊沢滋子 田中章子 鹿間桂子 富田洋香 奈良脱原発ネットワーク 松田高志 津村富代 アンゲリカ・クラウセン 中川慶子 向井千晃 小山師人 衛藤ますみ 庄田政江 碧海宏 上岩出診療所 岡村達郎 斎藤玖仁子 立間節子 田原良次 山崎知行 松本郁夫 横山清美 嶋田千恵子 赤部三千代 佐野米子 奈良脱原発ネットワーク 堀田美恵子 安田寿夫 岡田由江 即得寺 石田加代 齊藤充子 藤井学昭 村上寿美子 磯山靈秀 奥平純子 丸本加寿世 杉村ルミ子 陶山喜美子 遠山薫 野田暢子 福岡いさ子 金井正代 鎌田妙子 折口晴夫 増田京子 大西洋司 山田耕作 斎藤充子 大田美智子 藤井学昭 陶山喜美子 村田三郎 池田晴海 堀本フミ子 鎌橋照子 木下佳子 久保きよ子 東野セツ 定森和枝 ヒバク反対キャンペーン 若狭ネット 久保良夫 寺西清 前田ひろみ 大津定美 松川直子 山崎清 三田宜充 原三郎 淡川典子 木村英子 前田由充 原発の危険性を考える宝塚の会 反核フェス実行委員会 東南フォーラム常幹労組 長澤由美 振津かつみ 猪又雅子

チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西発足21周年の集い

日時：12月16日 午後1時30分～4時30分

場所：ドーンセンター5階／特別会議室

～26年目のチェルノブイリ現地訪問報告など～



お待ちしております！

主催：チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西

☆ウラン兵器禁止国際共同行動デー連帯 in 大阪／街頭行動と集会

11月4日（日）12時～ 街頭署名活動 梅田陸橋付近

14時～ 集会 市民交流センター なにわ

（環状線芦原橋 下車すぐ）

お話 振津かつみ（「ウラン兵器禁止を求める国際連合」運営委員）

主催：ウラン兵器禁止を求める国際連合（ICBUW）ジャパン・関西

多くの参加を！！

カンパ・会費納入のお願い

チェルノブイリ被災者とフクシマの被災者の交流、チェルノブイリの子ども達の保養支援、フクシマの子ども達の保養支援など、幅広く支援・交流に取り組んでいます。年末にはベラルーシに代表派遣を行う予定です。全てがみなさんの御協力とご支援により成り立っています。「救援関西」でも救援バザーを行うなど努力しています。恐れ入りますが、皆様のよりいっそうのご支援・ご協力をどうぞよろしくお願い致します。



ニュース発行：チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西事務局

〒546-0031 大阪市東住吉区田辺 1-9-12 山科方

郵便振替：00910-2-32752